

## 桃太郎を基に

桃太郎

お婆さん

鬼

暗転

照明、舞台全体

舞台上には、お婆さんがおり、家事をしている。

桃太郎、登場

婆さん あく、忙しい、忙しい。

桃太郎 ただいま。(元気がない様子)

婆さん お帰り。

うん？桃太郎、どうしたんだい？

桃太郎 …婆ちゃん。

婆さん なんだい。

桃太郎 ううん、なんでもない。

婆さん なんだい。何か言いたいことがあるなら、言ってみらん。

婆ちゃんは、いつだって桃太郎の味方なんだから、何でも言ってみらん。

桃太郎 …

婆さん ほら。

桃太郎 …

桃太郎 何で、何で僕の名前は桃太郎なの。

婆さん なんだい、また馬鹿にされたのかい。

桃太郎 …うん。

桃太郎、桃太郎って、内モモをつねられたんだ。

婆さん 内モモ。

桃太郎 桃太郎の桃は、太もものモモじゃないって言ったんだけど、みんな、僕の内モモをつねるんだ。

婆さん それは痛かったらう。

桃太郎 痛いなんてもんじゃないよ。

んくつて。

婆さん んくつてなつたのかい。

桃太郎 んくつてなるよ。

婆さん そうかい、そうかい。

で、桃太郎はどうしたんだい。

桃太郎 きび団子をあげた。

婆さん …何でだい。

桃太郎 婆ちゃん、いつも言ってるじゃないか。  
憎しみからは、憎しみしか生まれないって。  
どんな時も、みんなに優しくしろって。

婆さん でも、痛かったんだろ。

桃太郎 痛いじゃなくて、んくつだつて。

婆さん そうだったね。  
んくつだったね。

桃太郎 そう。

婆さん それなのに、きび団子をあげたのかい。

桃太郎 うん。

婆さん 桃太郎は、本当に優しい子だね。

桃太郎 僕、優しい子かい。

婆さん 優しいとも、で、内モモつねった子はどうした。

桃太郎 おいしい、おいしいって食べてた。

婆さん そうかい。

桃太郎 僕たちは仲間だつて言ってくれた。

婆さん そうかい。

桃太郎 でも婆ちゃん。  
何で、僕の名前は桃太郎なの。

婆さん いつも言ってるだら、桃太郎は桃から生まれたから、桃太郎なんだつて。

桃太郎 そんなのウソだよ。  
桃から人が生まれるわけないよ。

婆さん 桃太郎は奇跡の子どもなんだよ。  
だから、桃太郎は、自分の名前に誇りを持っていいんだよ。

桃太郎 じゃあ、婆ちゃん、僕は、植物なの。

婆さん え。

桃太郎 だつて、おかしいじゃないか。  
植物から哺乳類が生まれるなんて、あり得ないだろ。  
僕だつて、馬鹿じゃないよ。  
植物と哺乳類が違つてこと位分かつてる。  
僕が桃から生まれたんだつたら、僕は植物つてことじゃないか。  
ということは、僕は、日光さえあれば、光合成して生きていけるつてことじゃないか。  
ご飯なんて、食べなくて良いつてことだろ。

婆さん 桃太郎。

桃太郎 僕は一体、誰から生まれたんだよ。僕に桃太郎つて名前を付けたのは、一体誰なんだよ。

婆さん 桃太郎。  
あんたは、桃から生まれたの。

桃太郎 嘘だ。

婆さん 嘘じゃない。  
そうだ、いいかい、桃太郎。

DNA については、基本的に、植物も人間も一緒なの。

A、T、C、G の組み合わせの問題だけだから、ちよつとした何かで、植物が植物じゃなくて、人になる場合だって（あるかもしれない）

桃太郎 何言ってるかわかんないよ。難し過ぎるよ。

桃太郎、自分で自分の内モモをつねる

婆さん 何してるんだい。

桃太郎 桃太郎の桃は、内モモのモモだ。

婆さん やめなさい。

桃太郎 桃太郎の桃は、内モモのモモだ。

婆さん 桃太郎、やめなさい。

桃太郎 桃太郎の桃は、内モモのモモだ。

婆さん やめなさい。

婆さん、桃太郎を止める

婆さん、泣く

婆さん 桃太郎、馬鹿な真似はよして。

婆ちゃん、桃太郎をそんな風に育てた覚えなんてない。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん 自分で自分を傷つけちゃ駄目。桃太郎は優しい子でしょ

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん そんな桃太郎を婆ちゃんが見て、どう思うと思うの。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん 婆ちゃん、悲しいよ。

婆ちゃん、悲しいよ。

桃太郎 ごめんよ、婆ちゃん。

婆さん う、う。

桃太郎 ごめんよ、婆ちゃん。僕もうしないから。僕もうしないから、泣かないで。

僕が悪かったから、婆ちゃん、泣かないで。

婆さん もうしないかい。

桃太郎 うん。しないよ。

婆さん 桃太郎、あなたは、奇跡の子どもなの。

婆ちゃんにとって、あなたは奇跡の子なの。それで良いじゃないか。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん ね。桃太郎。

桃太郎 うん。

婆さん ぼら、じゃあ、手洗つといで。

桃太郎 うん。

桃太郎、退場

婆さん いつか、いつか本当のことを話さなければいけない日が来るんだらうね。

暗転

照明、舞台全体

舞台上、ご飯を食べている、桃太郎とお婆さん

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん 何だい。

桃太郎 お父さんは、今日も酔っ払って帰ってくるのかな。

婆さん 大丈夫。今日は、ちゃんとお仕事をして、疲れて帰ってくるよ。

桃太郎 そうかなあ。

婆さん 大丈夫。

さ、桃太郎は、早く食べて、早く寝ないよ。

桃太郎 はい。

鬼、登場。相当に酔っ払っている様子

怯える人

鬼 ただいま。ご主人様のお帰りだぞつと。

桃太郎 …お父さん、お帰りなさい。

鬼 おう。

婆さん お帰りなさい。

鬼 おう。

婆さん ほら、桃太郎、食べたなら早く寝なさい。

桃太郎 はい、はい。

鬼 なんでだよ。何で寝るんだよ。

俺に一杯付き合えよ。

婆さん 何言ってるんですか、桃太郎は、まだ子どもですよ。

鬼 子どもだらうが何だらうが、親の酌くらいはできるだらうが。(荒っぽく)

酒だ、酒を持ってこい。

なあ、桃太郎。

桃太郎 はい。お酌します。お父さんに、僕がお酌をさせてください。

鬼 おう、そうか、さすがは俺の息子だ。

ほら見ろ、婆あ。

桃太郎、ぶるぶる震えながら、お酌しようとして、こぼす。

桃太郎 ああ。  
鬼 てめえ、どこに酌してくれてんだ、こら。  
桃太郎 ごめんなさい、ごめんなさい。  
婆さん すみません、すみません。  
ほら、桃太郎、そちに行つてな。  
桃太郎 はい。  
鬼 てめえ、孫にどんな教育してやがんだ。  
婆さん すみません。  
桃太郎も反省してますから、どうか、どうか、許してやってください。  
桃太郎 お父さん、ごめんなさい。  
鬼 うるせえ。

鬼、婆さんを殴る。

婆さん ああ。  
桃太郎 婆ちゃん。  
婆さん 大丈夫。  
桃太郎 お父さん、僕が悪いんです。僕が悪いんです。ごめんなさい。  
婆さん 桃太郎、あなたは、外に行つてなさい。  
桃太郎 でも。  
婆さん 大丈夫だから、婆ちゃんが上手くやるから。あなたは外に行つてなさい。  
桃太郎 ∴  
婆さん 桃太郎。  
桃太郎 ∴はい。

桃太郎、外に出るが、こつそりと二人のやりとりを聞く

鬼 酒持つてこいよ。  
婆さん あんたがそんなだから、桃子は逃げて行つたんだよ。  
鬼 うるせえ。  
婆さん 出ていくなら、婿養子のあんたが出て行けば良かったのよ。  
鬼 うるせえ、お前の育て方が悪いんだよ。  
旦那と子どもを置いて逃げるような娘を育てたお前が悪いんだよ。  
婆さん 桃子が、毎日どんな気持ちでいたと思うの。  
鬼 うるせえ。  
婆さん 殴るなら、殴れば良い。  
鬼 ∴  
不愉快だ。  
飲みに行つてくる。帰ってくるまでに、寝とけよ。

鬼、退場

照明、暗転

照明、舞台全体

舞台上、ご飯を食べている、桃太郎とお婆さん

箸が進まない桃太郎

婆さん どうしたの。  
箸が全然進まないね。美味しくないかい。それとも、どっか身体でも悪いのかい。

桃太郎 美味しくないのはいつもだけど、別に身体は何ともないよ。

婆さん じゃあ、どうしたの。

桃太郎 ……

婆さん 桃太郎、黙ってちや分からないよ。  
そんな腹して食欲がないって、何かあるんだろ。  
言つてごらん。  
また、友達と喧嘩でもしたかい。

桃太郎 ううん。  
きび団子あげてからは、とつても仲良しだよ。

婆さん それは良かった。

桃太郎 うん。

婆さん じゃあ、どうしたんだい。

桃太郎 ……

婆さん お父さんは。  
また、今日もどっかで飲んだくれてんだろ。  
本当、どうしようもない男だよ。  
優しくそうな顔して、まさかあんな男だったなんて。  
……

婆さん あ、ごめんよ。  
昔は、良い男だったんだよ。多少頼りないけど、優しくてね。  
でも、信用してた人に裏切られてから、人が変わったように、あんな風になつちやつて。

桃太郎 ……婆ちゃん。

婆さん 何だい。

桃太郎 僕のお母さんは、「桃子」つて言うの。

婆さん ……

桃太郎 ごめん、昨日、婆ちゃんが心配で、聞いちゃった。

婆さん ……

桃太郎 お母さんは、僕を捨てて、出ていつちやつたの。

婆さん ……

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん ……

桃太郎 婆ちゃん、僕、桃から生まれたわけじゃないんだね。

婆さん 桃太郎、桃子は、あんたのお母さんは、決して、あんたを捨てたわけじゃないんだ。  
信しておくれ、あんたのお母さんは、決してあんたを捨てたわけじゃないんだ。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん ∴

桃太郎 僕、嬉しかったんだ。

婆さん 桃太郎。

桃太郎 僕嬉しかったんだよ。  
捨てられたのに、嬉しいつても変な話だけど、

婆さん そんなことはないんだよ。

桃太郎 とにかく、僕が思ったのは、僕にはお母さんがいるつてことが嬉しかったんだ。  
僕は、桃から産まれたわけじゃない。  
僕は、れつきとした、人間のお母さんから産まれたんだつて。  
桃太郎の桃はお母さんの名前から貰った桃だったんだつて。  
僕は、人から生まれた桃太郎だつて。

婆さん 桃太郎。

桃太郎 人から生まれた桃太郎。

婆さん 桃太郎。  
∴  
ごめんよ、桃太郎、ごめんよ。  
悪いのは、悪いのは、婆ちゃんなんだよ。  
桃子は、お前のお母さんは、私の娘なんだよ。  
最初は、お父さんとお母さんは、とつても仲が良かったんだ。  
でも、会社の上司に裏切られて、会社をクビになってから、全てが変わってしまった。  
お父さんは、だれも信用しなくなった。お母さんのことも信用しなくなった。  
信用しないだけならまだいい、暴力を、暴力をふるうようになった。  
だから、だから婆ちゃんが、あいつの知らない、田舎の親戚の家に避難させたんだ。  
桃子は、あんたを置いていくことはできないと言った。  
もちろん、私も桃子とあんたを引き離すつもりなんてなかった。  
∴  
あの日、あの男が酔いつぶれて寝たのを見計らつて、いざ家を出ようとした時、あの男  
が目を覚ましたんだ。何かに気づいていたんだろうね。  
とつさにあの男は、あんたを抱きかかえて、  
でも、私は、桃子だけでも、桃子だけでも。  
∴

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん ごめんよ、桃太郎、ごめんよ。

桃太郎 婆ちゃん。

鬼は相当に酔っ払っている様子

鬼 おらく、ご主人様のお帰りだぞ。

：

鬼 どうした。

鬼 何、お前ら、辛気臭い顔してんだ。

鬼 ご主人様が帰ったんだぞ。笑顔でお疲れ様です。つて迎えるのが、お前らの役目だろうが。

鬼 わかった。俺がついてねえのは、お前らのせいだ。

鬼 お前らと一緒にいるから、俺はついてねえんだよ。

鬼 だから今日も、あんなに負けたんだ。

鬼 そうだ、いかさまでも何でも無い、ついてないから負けたんだ。

婆さん あんた、博打にまで手を。

鬼 しょうがねえだろ。

鬼 酒代がねえんだから。

婆さん どつかで金稼がないとな。

婆さん 何言ってるの。

鬼 おい、ばばあ。金出せ。

婆さん この家のお金は、全部、あなたの酒に消えちまったよ。

鬼 はあ。

婆さん 当たり前だろ。働きもせず、毎日毎日酒ばかり飲んで。

鬼 この家のどこに、お金なんてあると思ってるんだい。

婆さん 俺は知ってるぞ。お前、ちよこちよこ貯めてんだろ。

婆さん で、そこにあるんだろ。

婆さん 借りていくぜ。

婆さん ：

鬼、金を取りに行く

婆さん やめて、やめて、そのお金は、そのお金だけは、

鬼 うるせえ。

婆さん 桃太郎の学費のために、

鬼 うるせえ。

鬼、婆さんを突き飛ばす

鬼 俺のガキの金を俺がどう使おうが勝手だろ。

婆さん そのお金は、桃子が桃太郎につて、毎月毎月送ってくれたお金なの。

桃太郎 お母さんが。

鬼 だったら余計に、その金を俺がどう使おうが勝手だろ。夫婦の問題だ。



桃太郎 お母さんが、僕のために。  
婆さん 桃太郎、ごめんよ。桃太郎、ごめんよ。  
鬼 お前は、うるせえんだよ。

鬼、婆さんを殴ろうとする

桃太郎 やめる。

桃太郎、婆さんをかばう

鬼 何だこら。  
どういうつもりだ。  
桃太郎 やめる。  
鬼 子供が親に歯向かうとは、どういうことだ。  
桃太郎 やめる。  
鬼 ばばあ、お前、孫をどう育ててんだ。  
桃太郎 うるさい。  
婆ちゃんの悪口を言うな。  
鬼 てめえ。  
どげ。

鬼、桃太郎を突き飛ばし、婆さんを殴ろうとする。

桃太郎 やめる。  
殴るなら、僕を殴れ。  
鬼 ∴  
桃太郎 僕を殴れ。  
鬼 本当に殴るぞ。  
桃太郎 ∴  
鬼 胸糞悪い。  
桃太郎 お父さん、お話があります。  
鬼 ああ。  
桃太郎 お父さん。  
金輪際、お酒を飲むのはやめてください。  
鬼 は。  
桃太郎 真面目に、真面目に暮らしましょう。  
お酒をやめて、真面目に働いて、みんな仲良く暮らしましょう。  
鬼 お前、誰に向かって、口きいてんだ。  
おい、こら、言ってみろ。  
お前は、誰に向かって、口をきいてんだ。

桃太郎 そのお金は、とても大事なお金です。  
そのお金に込められた想いを、お父さんは何も感じないんですか。

鬼 金は金だ。

桃太郎 お父さん、人の心を失くしたら、人は何になるのですか、

鬼 は。

桃太郎 人の心を失くしたら、人は何になるのですか。

ただただ人を傷つけ、あなたは鬼にでもなるつもりですか。

いや、もうすでに、あなたは鬼だ。

鬼 なんだと。

貴様、親に向かって、鬼だと。

桃太郎 お母さんと婆ちゃんが溜めた金を奪って、酒を喰らう。

お前を鬼と呼んで、何が悪い。

鬼 貴様。

鬼、桃太郎ともみあい、突き飛ばす

鬼 貴様、桃太郎に何を吹き込んだ。

婆さん 戻っておくれ。昔のやさしい男に戻っておくれ。

鬼 うるせえ。

鬼、婆さんを殴ろうとする

桃太郎 やめろ。

鬼 どげ。

桃太郎 やめろ。

桃太郎、鬼を刺す。

鬼 ぐわく。

婆さん 桃太郎。

鬼、倒れる

婆さん 桃太郎。

桃太郎 :

婆さん 桃太郎。

桃太郎 僕、僕、お父さんを

婆さん 大丈夫、大丈夫だから、

婆さん、桃太郎の手から刀を取る

婆さん あんたは何もしていない。  
あんたは何もしていない。  
あんたはこれから、桃子と二人で暮らすの。  
二人で、幸せに暮らすの。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん、懐から紙を出し、桃太郎に渡す

婆さん そこに行きなさい。桃子が待ってる。

桃太郎 婆ちゃん。

婆さん 大丈夫。

桃太郎は、鬼退治をしただけ。

鬼退治をした後の桃太郎は、幸せに暮らさなければいけないんだよ。

桃太郎 …

婆さん 桃太郎。桃太郎は、誰よりも優しくて、婆ちゃんにとって、奇跡の子だよ。

桃太郎 …

行きなさい。

桃太郎 …

婆さん 行きなさい。

桃太郎、退場

婆さん また、みんなで幸せに暮らそうね。

婆さん、電話を取り、

婆さん もしもし、

照明、暗転

音楽

## 浦島太郎を基に

エリス、亀

男 1

男 2、クラゲ

浦島太郎

客入れ

暗転

1

照明、うつすらと (音)

s. e. 海

舞台中央、亀がうずくまっている。

男 1、亀を連れて行こうとする。

照明、全体を明るく (ややオレシ)

浦島、釣竿を持って登場

浦島 やめろやめろ。

お前、何してんだ。

男 1 何だよ。

連れて帰ろうと思つて。

浦島 かわいそうだろ。

逃がしてやりな。

男 1 なんでだよ。

俺が捕まえたんだ。

どうしようが、俺の勝手だろ。

浦島 分かった、分かった。

それじゃあ、その亀を、おじさんに売ってくれないか。

男 1 え。

浦島 おじさんに、その亀を売ってくれないか。

男 1 ええ。

浦島 ほら。

浦島、懐から、お金を出し、男 1 に渡す

男 1 ∴

こんなに。

浦島 ほら、そのお金で団子でも買いな。

男1 え、あ、うん。

浦島 ほら。

男1 退場

浦島 大丈夫かい。

亀 :

浦島 ほら、亀さん、海へ帰りな。

亀、会釈をし、退場

浦島 一度と捕まるんじゃないぞ。

浦島、亀を見送り、手を振る。

照明、暗転

2

音楽

照明、全体を明るく

エリス、小走りで、ふらふらと登場

後を追って、男1登場

男1 待て。

エリス、男1に捕まる

男1にびんたされ、倒れる

男1 ほら、行くぞ。

今度逃げようとしたら、…

いや、お前は、俺のところから逃げられないんだよ。

男1、エリスの腕を掴む

エリス 放して。

男1 :

エリス 放してっつて。

男1、エリスの腕を放す

エリス もう良いじゃない、私を自由にしてよ。

男Ⅰ ……

エリス ……

男Ⅰ お前が自由になりたいなら、自由になるために何をすれば良いのか、お前が一番分かっているはずだ。

エリス ……

男Ⅰ さ、行くぞ。

エリス 無理じゃない。

今日の稼ぎが今日の利息にもならない。

どうやったら無理じゃない。

そんなの、あんたが一番分かっていることじゃない。

どうやったら無理じゃない。

もう十分でしょ。

男Ⅰ、エリスの腕を掴む

男Ⅰ 行くぞ。

エリス、男Ⅰの手を振り払う

男Ⅰ ……

エリス 毎日、毎日、知らない男に抱かれる私を想像するのが、そんなに楽しい。一時でも私のことが好きだったんじゃないの。

男Ⅰ ……

お前は、俺を裏切った。

エリス ……

男Ⅰ 俺はお前を、

俺は、俺を裏切った奴を、絶対に許さない。

エリス ……

男Ⅰ 毎日、毎日汚れていくお前が、どんな顔して、運命の男と出会っただろうな。

エリス ……

ごめんなさい。

ごめんなさい。

私が悪いの。

でも、お願い、もう私を自由にして。

自由にしてください。

男Ⅰ ……

お前は、一生、俺のもとで、誰だか分からない男に、毎晩抱かれて、死んで行くんだよ。

エリス ……

浦島、釣竿を持って登場

照明、暗転

3

音楽

照明、全体を明るく

エリス、男2舞台上

男2、エリスをすんぺしている

男2　なあ、良いだろ。  
遊びに行こうよ。  
カラオケなんかどう。  
俺良いところ知ってるから。  
飲みたいなら、それでも良いよ。  
俺、雰囲気良いところ知ってるから。  
大丈夫、大丈夫。  
ちょっと遊ぶだけだから。  
ね、行こう。

男2、エリスの腕を掴む

エリス、男2の手を振り払う

エリス　やめて。  
人待ってるから。

男2　嘘つけ、こら。  
人が下手に出てりや、良い気になりやがって。

エリス　：

男2　俺、ずっと見てたんだよ。  
1時間以上、ずっとここに立ってたろ。  
時計を見るわけでもない、誰も来るわけでもない。  
俺みたいな奴に声かけられたために、ずっと立ってたんだろ。

エリス　そんなことない。

男2　ほら、行こうぜ。

エリス　放して。

男2、エリスの腕を掴む

エリス、男2の手を振り払って、びんたしようとする

男2、びんたしようとした手を掴む

男 2 おとど。

エリス :

男 2 へへ、顔の割りに、気が強いんだね。  
俺、そういう女、好みなんだよね。

エリス、男2の手を振り払う

男 2 こう見えてもさ、俺、この辺で結構顔利くんだよ。

エリス :

男 2 優しくしてるうちに、一緒に来た方がさ、お前のためだと思うんだよね。  
俺が、生意気な女がいるからって、電話したら、お前、最悪な結果になるぜ。  
ね。  
さ、遊びに行こうか。

男1、登場

男 1 おい。

男 2 :

男 1 おい。

男 2 俺。

男 1 お前だよ。

男 2 なんだよ、おっさん。

男 1 やめとけ。

男 2 は。

男 1 みつともないナンパなんかすんな。  
お前みたいなガキがうるちよろして良い街じゃねえんだ。  
ガキはガキらしく、家に帰って、携帯でも弄ってる。

男 2 何だところ。

おっさん。おっさんこそ、若い女に良い格好したくて、しやしやり出てんじやねえよ。

男2、男1に掛み寄る

男1、男2の腹にパンチ

男 2 うっ

男2、うずくまる

男 1 おい。

返事は。



男1、男2を蹴る

男2 はい。  
男1 兄ちゃん、この辺で顔が利くんだって。  
男2 いえ。  
男1 じゃあ、俺が誰だか分かるよな。  
男2 すみません。  
男1 兄ちゃん。  
男2 すみません。  
すみません。  
すみません。  
男1 一度とこの辺うるつくな。  
男2 はい。  
男1 消えろ。  
男2 はい。

男2、ふらふらしながら退場。

エリス ∴  
男1 大丈夫だったか。  
エリス ∴ (頷く)  
男1 この辺はさ、たまに、あんな感じのバカな奴がいるんだよ。  
エリス ∴ (頷く)  
男1 お嬢ちゃんみたいな子が一人にいるのは危ないから。  
エリス ∴  
男1 とつとと帰った方が良い。  
エリス どうして助けてくれたの。  
男1 ∴  
エリス どうして、私を助けてくれたの。  
男1 どうしてだろうな。  
エリス ∴  
男1 昔の女を思い出したのかもな。  
エリス ∴  
男1 冗談だよ。  
バカな奴が増えると、商売がしづらくなる。  
エリス ∴連れてって。  
男1 ∴  
エリス 私を、あなたの所に連れてって。  
男1 ∴

やめとけ。

俺がどんな商売してんのか、大体見当つくだろ。

お嬢ちゃんなんか、関わって良い世界じゃない。

エリス 昔の女を思い出したんでしょ。

男 1 ::

エリス 私も、あなたを見たとき、何か、初めてじゃないような気がした。

あなたもそうじゃないの。

男 1 ::

エリス 私を、連れてって。

照明、暗転

4

音楽

舞台上、2のラストを再現

エリス ::

ごめんなさい。

ごめんなさい。

私が悪いの。

でも、お願い、もう私を自由にして。

自由にしてください。

男 1 ::

お前は、一生、俺のもとで、誰だか分からない男に、毎晩抱かれて、死んで行くんだよ。

エリス ::

浦島、釣竿を持って登場

男 1 お前は、運命の人に会うことなんてできないんだよ。

エリス やり方が汚いのよ。

男 1 そういう商売だからな。

知ってて付いてきたんだろ。

エリス 殺せば良いじゃない。

::

殺せば良いじゃない。

男 1 行くぞ。

男 1、エリスの腕を掴む

浦島 あの。  
男1 ::  
浦島 あの。  
男1 何だ。  
浦島 いや。  
::  
男1 見せ物じゃないんだ。  
どっかに行ってくれないかな。  
浦島 ::はい。

浦島 退場しようとする

男1 行くぞ。  
エリス 待つて。  
浦島 ::  
男1 ほら、行くぞ。  
浦島 あの。  
男1 ::  
浦島 あの。  
男1 何だ。  
言ったよな。  
見せ物じゃないんだから、どっかに消えろつて。  
浦島 はい。  
男1 何度も同じことを言わせないでもらえるかな。  
浦島 ::  
男1 ::  
浦島 嫌がつてるんで、止めた方が。  
男1 お兄ちゃん。  
浦島 はい。  
男1 悪いことは言わない。  
帰った方が良い。  
浦島 ::  
でも、彼女、嫌がつてるし、  
男1 ああ。  
でもね、嫌がつても、嫌がつてなくても、この女は、俺のものなんだ。  
俺の物を俺がどうしようが、俺の勝手だろ。  
そう思わないか。  
浦島 ::  
男1 お兄ちゃんの勇気は認めよう。  
でもね、(勇気だけじゃどうにもならないことも、世の中にはいっぱいあるんだよ。)

エリス、近くから何かを拾い、男1の後頭部を殴る

男1 うっ。

男1、倒れる

エリス 来て。

浦島 え。

エリス 早く。

男1 待て。

エリス 早く。

エリス、浦島を引っ張って退場

男1 待て。

照明、暗転

5

s. e. 海

舞台中央、浦島と亀（乙姫）が座っている

照明 青

亀 先日は、助けてくれて、本当にありがとうございました。

浦島 いやいや。

亀 どれだけ感謝しても、感謝し尽くせません。

浦島 まさか、あの亀があなただったとは。

亀 浦島様、せめてものお礼です。

心行くまで、ここで楽しんでいてください。

クラゲ、クラゲ、踊ってくれませんか。

クラゲ、登場

クラゲ はい。

音楽

照明、派手に

クラゲ、曲に合わせて、適当に踊る

それを見て、亀と浦島、楽しむ

浦島 俺も踊っちゃおうかな。

浦島も踊る

音楽アウト

照明、暗転

照明、明転

舞台中央に、浦島と亀が座っている

後方でクラゲが舞っている

浦島 このままここにいて、良いんだろうか。

亀 どうしたんですか、急に。

浦島 いや、もうずいぶん、ここにいて、このままで良いのかなって。

亀 浦島様、私といるのが嫌になったのですか。

浦島 そんなことはない。

君といて、嫌だと思っただことは、一瞬だってないよ。

本当だ。

ただ、家族や、友人たちのことが、少し頭をよぎったんだ。

亀 このまま、ここにずっと居たって良いじゃありませんか。

浦島 ∴

亀 私は、浦島様とずっと一緒にいたい。

浦島 ∴

わかった、こうしよう。

とりあえず、一回家族のもとへ帰るよ。

家族も友人も、心配してると思うし、一回顔を見せて、事情を話して、すぐに戻ってくる。

亀 浦島様。

浦島 な。

亀 ∴はい。

でも、約束して。

絶対に帰ってくるって。

浦島 もちろん。

絶対に、帰ってくる。

亀 ∴

クラゲ。

クラゲ はい。

亀 浦島様に。

クラゲ はい。

クラゲ、浦島に箱を渡す（マイム）

浦島 これは。

亀 ここに戻ってこられるようになったら、開けてください。  
すぐにあなただけを迎えに行きます。

浦島 分かった。  
絶対に、帰ってくる。

照明、暗転

6

音楽

照明 明るく

エリスと浦島（竿を持つてる）が、息を切らして、手を繋いで登場

浦島 はあ、はあ、はあ。

エリス はあ、はあ、はあ。

浦島 ::

エリス ::

浦島 ありがとう。

エリス ううん、私の方こそ、ありがとう。

浦島 ::

エリス ::

エリス、手を繋いでいることに気づき、手を放す

エリス あ、ごめんなさい。

浦島 あ、いや、こちらこそ。

エリス ::

浦島 ::

大丈夫ですか。

エリス え。

浦島 殴られてた感じだったから。

エリス 大丈夫。

浦島 ::

エリス ::

浦島 あの、::

エリス 何。

浦島 こんな時に、こんなこと言うのも何なだけぞ、

浦島 どこかで会ったこと

エリス …

浦島 いや、ごめん。  
そんな訳ないよね。

エリス …

私も、私も同じこと思ってた。

浦島 …

エリス …

浦島 …もしかして、

エリス、浦島を見て頷く

エリス 亀。

そう、私は、亀。

亀です。

エリス、浦島が何かを言おうとするのを制し

エリス あなたは、浦島様ですよ。

浦島 亀。

エリス 浦島様。

浦島 亀。

二人、抱き合う

音楽

曲EOしたら、浦島、エリスを放し

浦島 逢いたかった。

エリス 私もです。

浦島 ずっと探していた。

エリス 私も。

浦島 色んな時代に生まれ変わったけど、どの時代でも君を探してた。

エリス 私も。

浦島 亀。

エリス 浦島様。

…

でも、だったら、何故帰ってきてくたえらなかつたのですか。

浦島 え。

エリス 浦島様、すぐに戻ってくるって、絶対に戻ってくるって、そう言っただじやないですか。  
私、ずっと待ってました。

エリス 何故、私のところに戻ってきてくださらなかったのですか。  
私が亀だからですか。  
浦島 ちょっと待ってくれ。  
俺は、俺は、戻ろうとしたよ。  
エリス ……  
どういうことですか。  
浦島 家族に事情を話して、戻ろうとしたよ。  
だから、戻ろうとして、君から受け取った箱を開けた。  
そしたら、  
エリス どういうことですか。

### 男2、登場

男2 俺だよ。  
エリス あなたは、ずっと前に。  
私をナンパした。  
男2 俺が、違う箱を渡したんだよ。  
エリス ……  
男2 クラゲだよ。  
エリス ……  
クラゲ。  
男2 姫のそばにずっと居た、クラゲだよ。  
エリス ……  
男2 俺が、その男に違う箱を渡したんだ。  
時の箱を。  
エリス 時の箱。  
じゃあ、  
浦島 開けた途端、一気に年を取って、  
エリス ……  
浦島 だから、俺は、  
エリス 何故、何故そんなことをしたの。  
男2 ……  
分かりませんか。  
エリス ……  
男2 あなたのことが好きだったんです。  
クラゲの時から、あなたのことが好きだったんです。  
その男が来るまでは楽しかった。  
でも、あなたは、その男が来てから、変わってしまった。  
あなたの目に映るのは、その男だけ。  
その男が憎かった。



だから、一度と戻って来れないように、違う箱を渡したんです。

エリス

：

男 2

街であなたを見かけたとき、俺はすぐにわかりました。

姫だつて。

そして、その男を探してるんだつて。

何故、同じ時代に生まれ変わってしまったのかつて思いました。

でも、思つたんです。

その男が同じ時代に生まれ変わつてないかもしれない。

だったら、その男と一緒にいる前に、俺のものにしちやえば良いじゃないか。

どんな手を使つても。

そしたら、あの男が。

でもね、俺すつと、あなたのことを見てたんです。

いつか、チャンスがあるんじゃないか。

あなたが辛い思いをしているのは知っていました。

何とか、あそこから救いだせないか。

俺じゃ駄目ですか。

そいつは違うかもしれない。

そいつが浦島だつて保証はどこにもないでしょ。

ずつとあなたのことを尾けて、あなたのことを調べてたのかもしれない。

ねえ、俺じゃ駄目ですか。

エリス

こつちに来ないで。

男 2

ねえ、俺じゃ駄目ですか。

s. e. 銃声

男 2、倒れる

男 1、拳銃を持って登場

男 1

言つただろ。

俺は、俺を裏切つた奴を許さないつて。

エリス

：

浦島、エリスの前に出る

男 1

俺で良いじゃないか。

運命の人。

俺だよ、お前の運命の人は。

エリス

違う。

男 1

何が。

エリス

あなたじゃない。

男 1

俺だよ。

エリス あなたじゃない。  
男Ⅰ 俺だよ。  
エリス あなた(じゃない)。  
男Ⅰ 俺だ。  
エリス ∴  
男Ⅰ ∴  
エリス 竿を持ってないじゃない。  
竿を見て、すぐに分かった。  
この人が、私の運命の人だつて。  
あなた竿を持ってないじゃない。  
∴  
お願い、許して、私を自由にして。

男Ⅰ、札束を、浦島に投げる

浦島 ∴  
男Ⅰ あの時、俺がお前からもらった金の10倍はある。  
その金で、今度は逆に、俺がお前から買ってやるよ。  
エリス もしかして。  
男Ⅰ その男(男Ⅱ)と一緒にだよ。  
俺も、最初から分かってたんだよ。  
エリス ∴  
男Ⅰ ずっと後悔してたんだ。  
なんであの時、その男から金を受け取って、お前をそのもとにやってしまったんだらうつて。  
なんで、喜んで団子なんて買ってしまっただらうつて。  
∴  
行くぞ。

エリス、首を振る

エリス あなたじゃない。  
あなたじゃない。  
私は、あなたと会うために、生まれてきたんじゃない。  
この人に出会うために生まれてきたの。  
男Ⅰ 違う。  
エリス 違わない。  
男Ⅰ ∴  
エリス ∴  
男Ⅰ だったら、いなくなればいい。

男 1、拳銃を構える  
エリス、浦島をかばう  
男 1、エリス、見つめあう  
s. e. 銃声

浦島 何で。

男 1 お前を殺せば、哀しむだろ。  
哀しい顔は見たくない。

男 1、退場

浦島 亀。  
亀。  
亀〜。

音楽  
照明、青→暗転

了

## かぐや姫を基に

かぐや  
みかど  
男 1  
月の男

暗転

舞台上、中心にみかど、上手側にかぐや、下手側に男1が板付き

照明、男1狙い

男 1 失礼します。  
あのく、竹を受け取りに来たんですけど

照明、みかど狙い

みかど いらつしやい。

男 1 あ、失礼します。

あの、私

みかど ああ、話は聞いてますよ。

息子さんでしょ。

男 1 あ、ええ。

みかど どうぞ。

男 1 ありがとうございます。

みかど 養ましいな。

こんな立派な息子さんがいて、後を継いでくれるなんて。

男 1 ∴

みかど どうしました。

男 1 あ、いや。

みかど ああ、お父さんから、何も聞いてないのか。

男 1 あ、いや。

みかど お父さんも意地悪ですね。

私を見て、驚いてるんですよ。

男 1 え、ええ。

祖父さんの、もつと前からお世話になってるって聞いてたんで。

みかど ええ。

あなたの、曾祖父になるのかな。

男 1 そこの付き合いですよ。

男 1 だったら。

みかど お父さんも本当に人が悪い。

みかど まあ、お父さんも、同じようにお祖父さんに驚かされていましたがね。

男 1 ……どうということですか。

みかど 本当に何も聞かされていないようですね。

男 1 ええ。

みかど 親父は、ただ、ここに来て、竹を受け取るようにだけ。

みかど そうですか。

男 1 はい。

みかど ずいぶん若いんだな。そう思ってるでしょ。

男 1 はい。

みかど 自分と同じ、何代目かの人なのかなど。

男 1 はい。

みかど 違いますよ。

みかど あなたの お父さんにも、お祖父さんにも、曾お祖父さんにも、竹を分けてきた、本人そのものです。

男 1 でも、

みかど どうでしょうね。

みかど 私の話を信じられるようになるのは、あなたが、あなたのお父さん位の年になってからかもしれない。

みかど 実際、あなたのお父さんも、何だかんだ言って、信じたのは、最近かもしれない。

男 1 どうということですか。

みかど 遠い昔に、私は、不死の薬を飲んだんです。

みかど だから、遠い昔から、私は生きているんです。

みかど 信じられますか。

男 1 いや、

みかど 職人の手をしつらつしやる。

男 1 え。

みかど 良い手です。

みかど お父さんに、相当仕込まれましたか。

男 1 え、まあ。

みかど この竹林は、私にとって、とても大事な物です。

みかど 誰にでもお分けできるものじゃない。

みかど あなたのお父さんたちの様に、魂のこもった仕事をする人になら、そう思っています。

みかど お父さんに、しっかりと仕込まれたようですね。

男 1 あ、はい。

みかど あの、

みかど そうですね。

みかど あなたは今、雲を掴むような思いですもんね。

男 1

はい。

みかど

何から話せばいいのかな。

照明、暗転

照明、かぐや、みかど狙い

みかど、手紙のような物を見ている

みかど

どういうことですか。

月に帰らなければいけないとは。

書いてある意味を、私には理解することができません。

かぐや

次の満月の夜、私は月に帰らなければいけません。

私は、月の者です。

月より降りてきて、この地で生きてきたのです。

本来であれば、もっと早くに月に帰らなければいけませんでした。

ですが、お爺さんとお婆さんの優しさに触れ、貴方様の優しい言葉に触れ、

私の気持ちは乱れました。

この話を聞いて、お爺さんも、お婆さんも、貴方様も、きっと心を乱すことでしょう。

ですが、次の満月の夜に、私が月に帰ることは、覆すことができない、どうすることもできないことなのです。

たくさんのお愛情に対して、わきまをせよお別れしなければいけないことを、残念に思っています。

どうか、どうか、私のことは忘れて、幸せに暮らしてください。

みかど

待つてくれ。

ちよつと待つてくれ。

かぐや。

かぐや、待つてくれ。

かぐや狙いアウト

みかど

女は、かぐやは、美しい女でした。

その表情の一つ一つが、毅然とした目が、声が、

一目会ったその時から、私はかぐやの虜でした。

しかし、かぐやは、私に興味を示してはくれませんでした。

いや、今にして思えば、かぐやは、自分の置かれてる立場を分かっていたし、誰も、自分に寄せ付けないようにしていたんです。

かぐやは、お爺さんとお婆さんとの穏やかな生活だけを望んでいたんです。

でも、そうはならなかった。

かぐやの美しさは、瞬く間に広まって、私の耳にも入ったし、

言い寄る男もたくさんいた。

私もその一人でしたが。

望んでいた生活とはかけ離れた周囲に対して、かぐやは心を閉ざすようになり、誰にも顔を見せないようになってしまいました。

私も一旦は諦めよう思ったのですが、諦めきれなかった。

かぐやへの思いを断ち切れなかった。

どんな形でも良い、かぐやと繋がっていたい。

私とかぐやは、手紙のやりとりを始めたんです。

最初の頃は、一方的に、私が手紙を送っていたのですが、その内に、何通かに一回は手紙が帰ってくるようになり、そうしてるうちに、かぐやは、私に対して、少しずつ心を開いてくれるようになったんです。

照明、かぐや狙い

かぐや

明日は満月ですね。

私は、月が嫌いです。

月は、私たちに何を与えてくれるのでしょうか。

夜の闇の中で、白々しく光を与え、その光に人はすがってしまふ。

すがったところで、望みは叶うわけもなく、ただただ寂しさを私の周りに漂わせる。

貴方様が見ている月と、私が見ている月は違うもの。

私は、月が嫌いです。

みかど

何て寂しいことを言うのですか。

私の屋敷には、遥か昔からそこにあるという、閑麗な松の木があります。

苔むした石畳があります。

しかし私には、それが私だけの風景であり、どれだけ立派な物だとしても、哀しく思いません。

月こそが、あなたと私が共に見ることが出来る風景だとは思いませんか。

あなたが見る月と、私が見る月は同じものです。

明日の満月を見て、私は貴方を思い浮かべることでしょう。

暗転

照明、男1

男1

不死の薬はその女の人から。

みかど

ええ。

男1

：

みかど

信じられないでしょ。

男1

まあ、そうですね。

みかど

この竹林は、彼女が生まれ落ちた竹林です。

私は、また再び、この地に彼女が現れるのではないかと思い、自分の地位を捨て、この地を、この竹林を守っていくことを決めました。

私は当初、この竹は、誰にも譲る気はありませんでした。ですが、あなたの曾お祖父さんの熱意と、丁寧な仕事に心を打たれ、特別に。

男1 そうなんですか。

みかど ええ。

男1 その女の人は、どういう意図で、あなたに不死の薬をあげたんでしょうね。だって、不死の薬をあげたってことは、いつかまた会おう。そういうことですよ。

みかど どうなんでしょう。

男1 でも、どれだけ生きていても、その女の人は現れない。

それなら、ただ残酷なだけでしょう。

みかど そうですね。

男1 酷いじゃないですか。

みかど そうですね。

色んなことを考えました。

夜の数だけ、彼女のことを考えました。

暗転

照明、かぐや狙い

かぐや 遣いのものでしょうか。

月の男、登場 (宇宙人コス)

男1の位置

月の男 次の満月の夜、迎えに参ります。

どのような形で帰るかは、あなた次第です。

一月の猶予があります。

いか様にも。

かぐや 待ってください。

∴

月の男 何か。

かぐや 私は、∴月に帰りません。

この地に残ります。

月の男 聞き間違いですか。

今何と。

かぐや 私は、∴月に帰りません。

(この地に残ります。)

月の男 それはできません。

かぐや ∴

何故です。

月の男 この地は不浄の地。



賤しい思いが渦巻く地。  
 これ以上、あなたがこの地で汚れていくことは、許されません。  
 二度と月に戻れなくなる。

かぐや 構いません。  
 どれだけ汚れていこうと構いません。  
 月に戻れなくても構いません。  
 私は、この地に残ります。

月の男 逆に聞きたい。  
 何故、あなたはこの地で生きていこうと思われているのです。  
 見てきたでしょう。  
 賤しい人の思いを。行いを。  
 私たちの月にはその様な物は存在しない。

かぐや その代わりに何も存在しない。  
 何も。  
 それに、確かに賤しい思いも行いも見てきました。  
 ですが、この地に存在するのはそれだけではありません。  
 人を愛しいと想う、優しく、温かい想い（もあります）

月の男 どちらにせよ、

かぐや …

月の男 あなたの望みは叶いません。  
 次の満月の夜、迎えに参ります。

かぐや …  
 待つて。待つて。待つて。

かぐや、うすくまり、泣き崩れる

暗転  
 照明、みかど、かぐや狙い

みかど どんな手を使つてでも、君を守る。  
 君を月には行かせない。

かぐや 無理です。  
 私たちの存在は人智を超えたもの。  
 いかなる手を使つたとしても、私が月へ帰ることを止めることはできません。

みかど そんなことはない。  
 そうだ、私の屋敷に来ればいい。  
 私の屋敷の方が君を守りやすい。

かぐや やめてください。

みかど 何故だ。  
 君は月に帰りたいのか。そんなはずがない。

私は君を守るためだったら、この命を引き換えにしたって構わない。  
君が望むのなら、私は私の全てを使って、君を守る。  
翁から聞いているよ。  
最近、月を見て塞ぎこんでいると。  
月に帰りたくないんだろ。  
だったら、この地にいれば良い。  
追手が来ない所まで逃げれば良い。  
君は、私が守る。  
ずっと一緒にいよう。  
かぐや だから嫌だったのです。  
みかど ∴  
かぐや だから嫌だったのです。  
みかど ∴かぐや。  
かぐや 何か、勘違いをされてはいませんか。  
みかど ∴  
かぐや 私と貴方様は、ただ単に、手紙をやりとりする間柄。  
それ以上でも、それ以下でもございません。  
みかど かぐや。  
かぐや 私を守ってくれと、私が貴方様にお願ひしましたか。  
みかど やめる。  
かぐや 私を連れて逃げてと、私が貴方様にお願ひしましたか。  
みかど やめる。  
かぐや 私が貴方様との、将来を約束しましたか。  
みかど やめる。  
かぐや やめてくれ、かぐや。  
かぐや 確かに、貴方様との手紙のやりとりを楽しく感じたこともありました。  
ですが、それはつかの間の夢幻。  
あつという間に覚め、それ以上の感情を持つことは、一切ありませんでした。  
みかど 嘘だ。  
かぐや 本当です。  
みかど 君の言葉に嘘はなかった。  
かぐや ∴  
みかど 君の言葉には、心が宿っていた。  
それは私も一緒だ。  
君だってそれを感じていてくれたはずだ。  
かぐや もうこれ以上、  
もうこれ以上、お話しすることはありません。  
みかど かぐや、待ってくれ。  
かぐや もうこれ以上、  
私を苦しめないでください。

みかど  
：  
かぐや。かぐや。かぐや。  
かぐや  
：

照明、みかど狙いアウト

かぐや  
貴方様の言葉には、優しく、温かい心が宿っていました。  
貴方様の言葉には、私を強く、愛おしく想ってくださる心が宿っていました。  
私の言葉にも、貴方様の言葉と同様の心が宿っていました。  
だからこそ辛いのです。  
だからこそ苦しいのです。  
だからこそ、愛おしいのです。  
私の罪をお許してください。  
貴方様に心を開いてしまった、私の罪をお許してください。

暗転

照明、みかど、男1

男1  
それつきりですか。  
みかど  
彼女と言葉を交わしたのは、その時が最後です。  
彼女が月に帰ってから数日後、帰ってから渡すようにと言われていた、手紙  
と不死の薬を受け取りました。  
男1  
何が書いてあったんですか。  
みかど  
：  
私への、贖罪の言葉と、歌が一首。  
男1  
歌ですか。  
みかど  
ええ。  
いまはとて 天の羽衣 着る時ぞ 君をあはれと おもひいでぬる  
男1  
：  
みかど  
最後に、天の羽衣を着るまさにその時に、ふとあなたをしみじみ思い出してしまっ  
そういら意味です。  
男1  
どういうことですか。  
みかど  
月に帰って、月の着物を着る時に、それまでの記憶は消えてしまっていたと言っていました。  
男1  
：  
辛いですね。  
みかど  
辛かったですね。  
男1  
聞いても良いですか。  
みかど  
何でしょう。  
男1  
何故、不死の薬を飲んだんですか。  
あなたにとって彼女は、あなたの命と引き換えにしても良い位の存在だった。

彼女を失って、生きていく意味なんてあったんですか。

みかど ・・

捨てるように言いましたよ。

あなたが言ったように、彼女を失って、私は生きる意味を失ってしまいました。

彼女のいない世界に、価値なんてなかった。

むしろ死んでしまいたい位だった。

捨てるように言っただけです。でもね、すんでのところでは、不死の薬を飲んでしまいました。

男 1 ・・

生きていれば、いつかまた会えるんじゃないか。

みかど 最初の頃は、そんな風に思っていました。

男 1 最初の頃は。

みかど 夜の数だけ、彼女のことを考えました。

月を見る度に、彼女を想い、焦がれました。

いつだったかな。

ふと思えたんです。

彼女は、何もない世界で生きている。

美しいが、美しさを守るために、何もない世界で生きている。

彼女の笑顔、声を、涙を、誰かが覚えていなければいけない。

私が覚えていなければいけない。

そのために、私は生きているんです。

男 1 そんな。

それじゃあ、あなたは単に、犠牲になっただけじゃないですか。

みかど ・・

男 1 あなたには、何の得があるんですか。

この竹林を守ったところで、何があるんですか。

何もないじゃないですか。

みかど ・・

男 1 私の話を信じてくれるんですか。

みかど 作り話かもしれない。

男 1 不思議ですが、信じてます。

みかど ありがとうございます。

・・

好きな人はいますか。

男 1 います。

妻と息子を、愛しています。

みかど 息子さんがいるんですか。

男 1 はい。

みかど 素晴らしい。

男1 ありがとうございます。  
みかど 4代目だ。  
男1 そうなってくれば良いんですが。  
みかど 是非、あなたの後を継いで欲しい。  
私にとって、数少ない縁です。  
できれば、続いて欲しいものです。  
男1 頑張ります。  
みかど あなたも、あなたのお父さんも、お祖父さんも、曾お祖父さんも、みんな優しい人で良かった。  
男1 ……  
みかど あなたたちは、私の境遇を悲しんでくれた。私の境遇に腹を立ててくれた。それと一緒にですよ。  
男1 ……  
みかど 知っていました。  
今日は、満月なんですよ。  
男1 ……  
みかど 今日、彼女のことを想うんですか。  
みかど ……そうですね。

照明、男1アウト

音楽

みかど、後ろを見る

満月

かぐや登場 (宇宙人コス)

みかど ……

みかど、何かに気づき、振り返る。

かぐやが立っている。マスクを脱ぐ

暗転

## かたじそら

姫地蔵

ガリ地蔵

デブ地蔵

地蔵見習い

暗転

音楽

明転（地明り）

舞台、下手から、姫地蔵、ガリ地蔵、デブ地蔵の順に並ぶ

姫 はい、みんな。集合。集合。集合。

デブ 姫地蔵、そのノリ、うざいんで、やめてもらって良いですか。

ガリ おい。

デブ ガリ地蔵、お前だって、そう思ってるだろ。

ガリ 思ってるねえよ。

デブ 思ってるだろ。

ガリ だったら「はくい、集合しました。」って答えりやいだろ。

ガリ 何だと。

デブ そもそも集合してるしな。

姫 はいはいはい。みんな仲良くしましょう。

デブ だから、そのノリ、やめてもらって良いですか。

姫 はい、みんな、それじゃあ、私の話を聞いてくださーい。

デブ 俺の話も聞けよ。

姫 ∴

姫地蔵、小馬鹿にした感じの表情で、デブ地蔵の話を聞こうとする。

デブ 頭来んな。

ガリ すみません。姫地蔵の物言い、本当にうざいんで、俺が仕切つていいですか。

ガリ デブ地蔵。

ガリ お前何てこというんだよ。

ガリ 姫地蔵に失礼だろ。

デブ 失礼かもしれないけど、実際、そっちの方が、スムーズに話が進むだろ。

ガリ 確かに、それはそうだが、言い方つてもものがあるだろ。

姫 良いよ、良いよ。

姫はね、気にしないよ。天然だから気にしないよ。

でも本当は、傷ついているけど、泣きそうだけど、気にしないよ。  
ガリ ほら。

デブ ……  
姫 はいはいはい。

それじゃあ、姫が決めます。  
姫は頭が悪いので、喋りが上手くないので、MCを譲ります。  
デブ そこまでは言っていないですよ。  
姫 デブ地蔵。  
お前が仕切れば良いじゃない。

姫地蔵、ズズズつと言いながら、横を向く

ガリ ほら。  
デブ ……

それじゃあ、姫地蔵からの指名もありましたので、ここからは、私、デブ地蔵がこの場  
を仕切らせていただきます。

それじゃあ、まず、姫。  
デブ ずっと立ってるのもかつたるいので。  
ガリ かつたるいって何だよ。

デブ うちらは立ってるのが基本だろ。  
ガリ 基本は、あくまで基本だよ。

デブ 基本は、どこまで行っても基本なんだよ。  
ガリ うちらはしつと立ってなきやいけないだろ。

デブ 姫地蔵、動いたからな。  
ガリ ……

デブ 姫、おそらくもう人も通らないと思うので、ここは、一旦座って、落ち着いて話をした  
方がよろしいんじゃないでしょうか。

姫 ……そうだね。(笑顔)  
ガリ ……

地蔵たち、椅子をスタンバイ。

まず姫が意気揚々と動き、その後、だらだらとデブとガリが動く  
中央奥に姫用。下手にガリ、上手にデブ。

一同座る

デブ それでは早速、先ほど、うちらに笠を掛けてくれた、爺さんの件についてです。  
姫 そう。姫、気になってるの。

デブ さつきねえ。  
姫 おじいちゃん、うちらに笠掛けてくれたじゃん。

それで、姫は思うんだけど、何か、お礼的なこと、した方が良くないかなって。

その辺をね、二人の意見聞いてみたいなうって。

ガリ …

デブ …

それじゃあ、まずは私から。

はつきり言つて、…いらなと思います。

ガリ …

俺は姫に賛成です。

姫が言うように、何かしらのお礼をすぐきだと思ひます。

姫 でしょ。でしょ。

ガリ 早速、お礼の品を手配し、今晚にでも、持つて行けばいいかど。

王子 うん、うん。

デブ ちよつと待つてください。

先ほども言つたように、私は、反対です。

ガリ なぜ。

デブ 姫、そういうことは、もつと慎重に行うべきです。

相手がどういふ気持ちで、我々に笠を掛けたか分からない以上、逆に迷惑になる場合だつてあり得ます。

ガリ おい。

デブ 姫、必ずしも、

ガリ おい。

デブ 何かをいただいたからといつて、

ガリ おい。

デブ お礼をしなくてはならない

ガリ デブ。

デブ …何だよ。

ガリ 相手がどういふ気持ちかだつて。

親切心に決まつてるだろ。

お前も見ただろ、お爺さんの顔。良い人そつな顔してただろ。

デブ 見ただ目で判断してどうする。

残酷な殺人事件が起つて、周囲の人に話を聞いたら、「良い人そつだつたのにね。」

つてニュースを、お前は見たことがないのか。

見ただ目で判断できる世の中じゃないんだよ、今は。

ガリ あのお爺さんは良い人に決まつてるだろ。

デブ 何故わかる。

ガリ …

デブ …

ガリ 面倒くさいだけだろ。

デブ は。

ガリ お前は、面倒くさいだけだろ。

お礼の品を引きずつて、ずずつ、ずずつて、行くのが面倒くさいだけだろ。



デブ …ああ、面倒くさいね。

ガリ ほらみる。

デブ 面倒くさいことを、面倒くさいって言って、何が悪い。  
面倒くさくても、やらなきゃいけないことは、ちゃんとやるよ。  
確かに、ずずつ、ずずつて行くのは面倒くさいよ。  
でもな、俺は今、それを問題にしてるわけじゃないんだよ。

ガリ してるよ。

デブ してないよ。  
だったら、俺は姫にこう言うよ。  
姫、あの爺さんの家、ここから相当あるかもしれませんが。  
その距離を、重い荷物引きずって、行きたいですか。  
ずずつ、ずずつて、行きたいですか。どうですか、姫。

姫 え。

デブ 重い荷物引きずって、ずずつ、ずずつて、本当に行きますか？

姫 え。

デブ ほら見る。姫はそういう地蔵だよ。  
距離的な問題で、面倒くさいか、面倒くさくないかって話なら、最初からそうやって聞  
いてるよ。

ガリ じゃあ、何が問題だって言うんだよ。

デブ 言っただろ、相手がどういら気持ちで俺らに笠を掛けたか分からない以上、  
簡単に、おれはすべきじゃないって言ってるんだ。

ガリ …

デブ …

ガリ デブ、お前は、自分を何だと思ってる。

デブ は。

ガリ お前は、自分を何だと思ってる。

デブ …地蔵。

ガリ ああ、そうだ。  
俺たちは地蔵だ。  
地蔵の俺たちが、俺たちの見る目を信じられなくてどうする。

デブ …

ガリ 俺は、あのお爺さんは、良いお爺さんだと思う。  
お前も見ただろ、あの、こういう目と、目元のしわと。

デブ ああ。

ガリ だったら何で。

デブ 時代が変わったんだよ。  
昔とは違うんだ。簡単に、目元で判断するのは危うい。

ガリ それでも俺たちは、人の良心を信じるべきじゃないのか。

デブ 裏サイトって知ってるか。

ガリ 裏サイト。

デブ ああ。  
普段は仲良くしてる友達が、裏サイトでは、平気で悪口を書きまくる。  
そんな世の中なんだよ、今は。

ガリ あのお爺さんが、そこまでネットに明るいわけないだろ。

デブ 今のは例えだ。  
見た目で判断するのは、危う過ぎるってことを言ってるんだ。

ガリ …

ガリ地蔵、立ち上がり

ガリ おい。

地蔵見習い。ファイルを持って登場  
ファイルをガリに渡す

デブ 誰だお前。

見習い 地蔵見習いとして、ガリ地蔵師匠の付き人やらせてもらってる、〇〇です。

地蔵見習い、退場

ガリ 先ほどのお爺さんの身边を調べました。

デブ お前、いつの間に。

ガリ お爺さん。名前は権蔵。128歳。  
お婆さんのイネ、132歳と二人暮らしです。

姫 姉さん女房なんだ。

ガリ はい。

子どもは、いません。

姫 あらう。

ガリ 年の割には、元気で、自分たちのことは、自分たちでやっています。  
村の外れ、森を抜けた先の、小高い丘の上に建つ、築70年の家に住んでいます。

姫 最後、上り。

ガリ はい。

結構な傾斜になってますね。

姫 きつついねえ。

ガリ 二人で、自給自足の暮らしをしているのですが、今年は、ご存じのとおり、冷夏だった  
ため、作物が思いのほか取れず、かなり厳しい生活をしているようです。

それこそ、年を越すための、餅も用意できない状況らしいです。

そこでお爺さんが、笠を作つて、街に売りに出かけたのですが、全く売れず、売れずに  
残った笠を、我々にかけてくれたようです。

姫 最後上りか。

ガリ どうだ。  
この話を聞いても、お前はまだ、あのお爺さんを疑うのか。  
デブ 笠を掛けてくれた、イコール、優しさにはならないだろ。  
姫 最後上りか。  
ガリ ∴  
おい。

地蔵見習い。ファイルを持って登場  
ファイルをガリに渡す

デブ だから、誰なんだよ、お前は。  
見習い 地蔵見習いの〇〇です。

地蔵見習い、退場

ガリ お爺さんとお婆さんを知ってる人を、無作為に30人抽出し、聞き取り調査も行いました。  
デブ お前、いつの間に。  
ガリ 結果としては、モニターの98%が良い人だと答えました。  
デブ 98%。残りの2%は。  
ガリ 犬だ。  
デブ ∴  
ガリ デブ、ほぼ100パーセントだぞ。あり得るか。  
デブ 爺さんと婆さんが、人の手を借りずに、一生懸命生きてれば、大概の人は良い人だと思うだろ。  
ガリ 具体的にどこが良い人なのか、聞いてみたところ。  
最も多かった答えが、本当に気持ちの綺麗な人たちだということです。  
デブ 人が他人の気持ちが見えるんだったら、おぞましい事件なんて起こるわけないだろ。  
ガリ こういった答えもありました。  
若い人の言葉にも耳を傾け、その上で、こうした方が良いんじゃないかと、優しく正しい道を示してくれる。  
困っている人を見ると、放っておかず、自分たちも豊かじゃないにもかかわらず、私財をなげうつでも、助けてくれる。  
∴  
今回の笠がまさにそれだろ。  
デブ 見返りを期待してるのかもしれないな。  
ガリ 貴様。  
デブ そうだろ。  
デブ お前には、人の気持ちがないのか。  
ガリ 俺は地蔵だ。

睨みあう、デブとガリ

姫 まあまあまあ。  
一旦、休憩しよう。  
二人とも熱くなりすぎ。  
二人が熱くなると、ビビる。  
姫 かなりビビるから。  
離れよう。  
二人、離れよう。

デブ、ガリ、それぞれの椅子に座る  
見習い登場。姫とガリの飲み物を持つてくる。

デブ 俺のは。  
見習い ∴ (馬鹿にしたような顔)  
デブ なんだよ、その顔は。

見習い、退場  
和まない空気

姫 姫地蔵、物真似します。  
おら、しんのすけだぞ。  
二人 ∴  
姫 ピーターの物真似でした。  
ガリ クレヨンしんちゃんだろ。  
デブ しかも、せめて、ピーターじゃなくて、池畑慎之介って言うてくたさいよ。  
姫 解れたね。解れたね。  
二人 はい。

姫 じゃあ、ちよつと姫の話聞いて。  
まあ、今までの話を聞いて、姫個人としては、まあ、お礼はしても良いんじゃないかな  
つて、思ってるかな。

デブ 姫。  
姫 まあ、お、4ね。  
お、お礼あり、4無し。  
正直、何だかんだいっても、笠だしね。うちらにとつてあんまり関係ないし。  
吹雪いたら、頭もそうだけど、結局、身体全体に雪、がんがん当たってくるし。  
そういう意味では、笠自体を考えれば、だからって感じしない。  
ガリ 姫。

姫 分かっている分かってる。  
ガリが言いたいことも、ちゃんと分かっているから。  
気持ちの部分も、当然大事だよ。  
だから、さな訳だし。  
そういう気持ちは、ありがたいよね。  
失くしちゃいけないもんだよね。  
そういうこと言いたいんでしょ。

ガリ はい。  
姫 ちゃんと分かっているから。  
∴  
後、最後のところ、上りなんでしょ。  
ガリ 上りですね。  
姫 どうなの。私たち、上れそう。  
ガリ それは、問題ないんじゃないかなど。  
姫 ∴うくん、最後上りか。  
ガリ 姫、私はやはり、お礼はすべきだと思います。  
心根の綺麗な人は、救われなければなりません。  
高齢の二人が、大変な状況にある中で、優しさだけで、我々に笠を掛けてくれた。  
その美しい行為に、誰が救いの手を差し伸べるのですか、我々しかいません。  
そして、今回、我々が、手を差し伸べた結果、より多くの人が、優しい気持ちを持つようになるかもしれません。  
我々は、そう言ったことを、啓蒙していく必要もあると思うんです。

姫 それはそうだね。  
デブ 売れ残りを、捨てるのが面倒くさいから、我々に掛けていっただけかもしれませんよ。  
ガリ デブ。  
デブ そうだろ。  
売れ残った笠を持って帰っても、ゴミになるだけだ。  
ゴミになるくらいなら、都合が良いから、置いていただけかもしれない。  
ガリ 持って帰れば、来年の在庫になるだろ。  
デブ 今日売れなかったものが、来年売れる保証がどこにある。  
デザインが古いんだよ。  
ガリ ∴デザインって。  
デブ 来年も、再来年も売れねえよ。  
ガリ ∴  
デブ 人のやさしい気持ちの啓蒙って、お前は言ったよな。  
ガリ ああ。  
デブ 俺は逆だってあり得ると思うぞ。  
ガリ どういうことだよ。  
デブ 今回、仮に俺たちが爺さんにお礼をしたとする。  
それを聞いた人はどうすると思う。

ガリ みんな、良いことをするだろう。  
デブ 寡うな。  
みんな、俺たちにどんどん笠を掛けに来るだろう。  
俺たちに笠を掛ければ、お礼がもらえる。  
楽に、富を得ることができる。  
俺たちの頭の上に、いくつ笠が重なると思ってるんだ。  
ガリ そんなことはない。  
デブ 新しい名所だぞ。  
ガリ そんなことはありえない。  
デブ 名所になる位ならまだいい、俺たちの首はどうなる。重きに耐えられるのか。  
ガリ 耐えられる。  
デブ 根拠は。  
ガリ 根拠。  
デブ 耐えられる根拠は何だっけ聞いてるんだ。  
首が曲がった地蔵で名所になるかもしれんな。  
ガリ 俺たちは石だ。  
デブ ……  
ガリ 根拠は、石だからだよ。  
デブ ……  
ガリ 何故、お前はそんな風に考える。  
デブ お前は人を信じ過ぎるんだよ。  
ガリ 俺たちは、人を信用して、救っていかねばならないんだぞ。  
デブ それは、その人によるだろ。  
ガリ だからだよ。  
あのお爺さんの、どこを疑う必要がある。  
デブ ……  
ガリ ……  
デブ 話にならないな。  
ガリ こつちの台詞だよ。  
姫 ビビるから。  
デブ ……  
ガリ ……  
姫 ビビるって言ったし。  
姫、今本当にビビってるし。  
落ち着いて。  
ガリ ……  
デブ ……  
ガリ デブ。  
デブ ……  
ガリ いつからお前はそりなつた。

デブ 何が。  
ガリ 面倒くさいんだろ。  
デブ 何が。  
ガリ 荷物持って、お爺さんの家に行くのが面倒くさいんだろ。  
デブ それもある。  
ガリ デブ。  
デブ だが、  
ガリ デブ。  
デブ だが、  
ガリ デブ。  
デブ デブ。  
デブ 何も言っていないよ。  
ガリ お前、今の単なる悪口だからな。  
ガリ じゃあ他に何かあるってんだよ。  
デブ 何もないだろ。  
ガリ お前は、ただ面倒くさいだけだろ。  
デブ 分からないのか。  
ガリ 分からないね。  
デブ 俺には、屈理屈こねて、面倒くさいから行きたくない、そう言ってるようにしか思えないね。  
ガリ もはや今は昔とは違うんだよ。  
デブ あのお爺さんに、下心なんてない。  
ガリ そんなことは分かっている。  
デブ だったら何で。  
ガリ ::  
デブ ::  
ガリ ガリ、お前の言っていることは正しいと思う。  
デブ だったら、  
ガリ だが、正しいことが、逆に人を困らせることもある。  
デブ 考えたことがあるか。  
ガリ 俺たちが爺さんの家にお礼の品物を持っていったとする。  
デブ そして、お前が言うように、善いことをすれば、神様が助けてくれる。  
ガリ そういうことを、あの爺さんはみんなに言うだろう。  
デブ 良いことじゃないか。  
ガリ 聞いたみんながそう思ってくれば良い。  
デブ でも今は、そんなに単純じゃないんだ。  
ガリ さっきも言ったように、楽しんで何かを欲しがって、俺らが卒たけになるかもしれない。  
デブ そういうモノも存在するんだよ。  
ガリ その時は、俺たちがお礼をすべきかどうか、見極めれば良いだろう。  
デブ 俺たちに来なかった場合はどうなる。

ガリ ……  
デブ 俺たちにだったら、俺たちが見極めれば良い。だが、人を疑うことを知らない、お爺さんとお婆さんがターゲットになったら、どうする。  
お前の報告にもあつただろ、自らの私財を投げ打つてでも、人を助ける。  
最高のカモだよ。  
ガリ デブ。  
デブ お前はそこまで考えて、お礼をすべきだと言つてるのか。  
ガリ ……  
デブ 俺達の厚意が、逆に、爺さんたちを苦しめることになるかもしれないんだぞ。  
ガリ デブ。  
デブ ……  
ガリ お前、そこまで。  
すまなかつた。  
デブ 俺だって、お礼はしたい。  
ガリ ……  
デブ ……

ガリ、そつと手を差し出す。

ガリ デブ、お前は、やっぱり、デブ地蔵だよ。  
デブ ガリ、お前こそ、ガリ地蔵だよ。

二人、握手。  
姫、二人の握手の上に手を重ねる

二人 姫。  
姫 「他言無用。もし、このことを誰かに言つたら、殺す。」  
そういう文書を残したらどうだろう。  
二人 姫。  
姫 ぼやぼやすんなく、お礼の用意だ。  
二人 はい。

音楽

暗転 ※暗転になる間、地蔵に、用意するものの指示等を出す